

英語教育学の私の方針

中野 美知子

早稲田大学での教育学研究科は 1990 年に修士課程が創設されたが、その年に着任し、2015 年 3 月に退職するまで、25 年間英語教育専攻の研究指導に従事してきた。個人的な研究と経験に基づいて、英語教育学についてまとめたが、『英語教育の実践的探究』で詳細を述べているので、読んでいただければ幸いである。

だれでも、自分の受けた教育から多大な影響を受けるもので、私もその例外ではなく、エディンバラ大学での大学院教育に基づき、早稲田大学着任当時から心がけてきた事は以下の 3 点である。

1. どのような提案をするにしろ、実験を行い、Evidence-based の発言をすること
2. 英語教育は、言語学の応用であり、言語学は当時『科学』として認識されていたので、科学的資料を勉強し、英語教育に一番適切な理論を選択すべきである。その理論に元づいた英語教育を考えるべきである。
3. 人間を教える学問であるので、人間の心理、取り巻く社会、政策、言語の果たす役割（社会言語学）通時的な言語の歴史的な変化と共時的な変化を同時に視野に入れるべきである。

エディンバラ大学は当時応用言語学という学問体系を構築たばかりで、いわゆる大御所が教員であった。H. Widdowson, G. Brown, S. Pit Corder, A. Davies, H. Trappes-Lomax, T. Howatt, John Lyon, Halliday and Hasan, David Abecrombie までいた。音響学や合成音の生成は J. Labor, が担当していた。3 学期制で、1 学期は、統語論、実験研究、社会言語学、2 学期は言語心理学、インターランゲッジ、意味論、ハリデーの Systemic-Functional Grammar 3 学期は伝統文法、音響学、音の合成などを習った。このほか、Brown & Yule が心理学科の人たちと

Discourse や音声研究を行っており、参加した。また、現在の人工知能の前身の Machine Intelligence との共同授業もあり、コンピュータ言語の Logo と Prolog を学習した。エディンバラ大学では大御所から学んだため、理解が進んだので、早稲田大学の大学院では、大御所のオンデマンド講義を聞かせたり、サイバーゼミを開講した。この修士時代は今までにないほど勉強させられた。例えば、Syntax は Chomsky の Initial Theory から始め、Standard Theory, Extended Standard Theory、Revised Standard Theory の原著を読みながら、チョムスキー理論の内容と変化の理由を討論するもので、言語学を学部時代に勉強していなかった学生たちが2ヶ月半でこなすのは、相当な努力が必要だったが、チュートリアル形式の授業を体験できた。英語チュートリアルを学部生に開講して成功したが、原案はこの授業である。当時は統計のソフトがなく、Fortran を自分で勉強し、分散分析、主成分分析、対比較法、多次元尺度などをプログラムできるようになった。時代に応じて、ツールが進化するので、進化したツールを大学院生は自分でマスターしなければならず、自分の担当する大学院生にはこのことを伝えている。第2言語習得研究には演繹的方法と帰納的方法の2種類があることに注意した。要するに、論理的に正しい言語理論から演繹して、実験計画を導出していくのが最適な研究方法であるとの結論に至った。この理由で、論理学や数学基礎論での証明を経た理論が論理的に正しい理論であるとの立場をとった。着任当初より、実験により教育効果を示す実験計画と分析方法ならびに言語学や英語学での知見をもとに英語教育を考察していくゼミを担当し、応用言語学という1970年代から20年間研究されてきた分野を踏襲した。即ち、実験研究による証拠を得るために、統計を学ぶのはもちろんのこと、言語学や英語学、調音・音響音声学、教育心理学、認知心理学、認知意味論など、なるべく教育現場にいる学習者の学習過程を探るきっかけになるものは、可能な限り勉強することを心がけた。学部生のためのコースも幾つか手がけたが、教育効果の調査をしつつ、教材改革を行ってきた。

(中野美知子 編著『英語教育の実践的探究』 溪水社 2015年2月より抜粋)